

短 報

鹿児島大学構内におけるヒヨドリの秋季の渡りの観察

平田 令子¹⁾・平井 周作¹⁾・畑 邦彦²⁾・曾根 晃一²⁾¹⁾ 鹿児島大学大学院農学研究科森林保護学研究室 〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元1-21-24²⁾ 鹿児島大学農学部 〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元1-21-24Observation of the autumn migration of the Brown-eared Bulbul, *Hypsipetes amaurotis*, on the Korimoto campus of Kagoshima University.HIRATA Ryoko¹⁾, HIRAI Shusaku¹⁾, HATA Kunihiko²⁾ and SONE Koich²⁾¹⁾ Graduate School of Agriculture, Kagoshima University, 1-21-24 Korimoto, Kagoshima 890-0065, Japan²⁾ Faculty of Agriculture, Kagoshima University, 1-21-24 Korimoto, Kagoshima 890-0065, Japan

Received Dec 26, 2008 / Accepted Dec 30, 2008

Summary

On the Korimoto campus of Kagoshima University, we observed the flocks of the Brown-eared Bulbul, *Hypsipetes amaurotis*, passing over on ten days from October 2 to November 5, 2008. Flocks were observed on six days: October 2, 8, 9, 10, 12, and 19, 2008. Most of the flocks passed over the campus between about 7 to 8 o'clock and flew to the southwest or south-southwest. Flock size was in the range of 7-80 individuals, and the average was 33. On and after October 28, no flocks of the Brown-eared Bulbul were found passing over the campus. We considered that these flocks were on the way to migration because of either their flock size of up to 10 individuals and over or their flight behavior at a high altitude. On their way over the campus, 6 flocks visited either the campus botanical garden or the campus pond for a short time. This observation suggests that these habitats in urban area may play a role as stopover habitats for migrating Brown-eared Bulbul.

Key words : autumn migration, habitat in urban area, Brown-eared Bulbul

キーワード : 秋季の渡り, 都市緑地, ヒヨドリ

はじめに

ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis* はヒヨドリ科に属する全長約27.5cmの中型の鳥で、日本、朝鮮半島南部、台湾、フィリピンなどに分布している(樋口ら1997, 高野1982)。日本では漂鳥または留鳥として全国的に分布し、北日本や山地の個体群の一部は、秋季には群れをつくり、南部や低地へと渡る(高野1982)。北海道松前半島南端や房総半島南端、愛知県渥美半島の伊良湖岬の突端、関門海峡などでは数十~数百羽の群れが、海上を渡って南下することが知られている(樋口ら1997, 高野1982)。鹿児島県においては、

大隅半島南部に位置する稲尾岳や佐多岬などで、南下するヒヨドリの群れが見られる(鹿児島県環境生活部環境保護課2002, 鹿児島県保健環境部環境管理課1988, 内田1983, 日本鳥類保護連盟1985)。

ヒヨドリは、1970年ごろから市街地でも繁殖するようになり、今日では公園や住宅地などで一年中生息が確認され、キジバト *Streptopelia orientalis* やコゲラ *Dendrocopos kizuki*, チョウゲンボウ *Falco tinnunculus* などの小型の猛禽類とともに都市環境への適応が著しい種の一つである(樋口ら1997, 唐沢1996)。北方や山地から渡って来るヒヨドリにとっても、都市近郊の公園等が越冬場所となっている(樋

口ら1997)。しかし、そのような市街地の緑地が、より南へと渡って行く渡り途中のヒヨドリにとって中継地としての機能も果たしているのかについては報告が少なく、市街地上を渡るヒヨドリの行動に及ぼす影響は明らかではない。

鹿児島市の市街地に位置する鹿児島大学構内においては渡り途中と思われるヒヨドリの群れの通過が秋季に観察される。そこで、大学の校舎の屋上を定点とし、ヒヨドリの群れの行動を観察したところ、渡り途中と思われるヒヨドリの大きな群れが大学上空を通過して南東～南西の方角へと飛去し、一部は大学構内の植物園や池を一時的に利用していることが確認されたので、ここに報告する。

調査地および調査方法

調査は、鹿児島県鹿児島市郡元に位置する鹿児島大学郡元キャンパス内(北緯31°34′, 東経130°32′, 標高4m)で行った(図1)。郡元キャンパスは鹿児島湾の西岸から内陸へ約2kmの市街地の中に立地している。キャンパス周辺には街路樹としてクスノキ *Cinnamomum camphora* が多く植栽されており、緑の豊かな環境となっている。キャンパスの敷地面積は約35haで、キャンパス内にはクスノキやクロガネモチ *Ilex rotunda*, ワシントンヤシ *Washingtonia filifera* などが通りに沿って植栽されている。キャンパス北部の農学部構内には実験農場があり、一年を通して作物が植えられている。また、約1haの面積の植物園があり、そこには

九州南部から琉球列島に分布するモチノキ科やモクセイ科などの樹木を中心に約300種が植栽されている(藤田2004)。また、植物園に隣接して、人工的な池(玉利池)と植栽された樹木からなる公園がある。大学構内では様々な鳥類が観察され、植物園では渡り鳥を含め27科72種が記録されている(鹿児島県保健環境部環境管理課1988)。今回の調査期間中には大学構内では19科25種が観察された(表1)。

大学上空を通過するヒヨドリの群れの行動を調査するために、2008年10月9日から11月5日までの10日間(10月2, 8, 9, 10, 12, 14, 19, 28, 31日, 11月5日), 農学部構内の4階建ての校舎(E棟)屋上を定点として観察を行った。E棟は植物園と玉利池から北西へ約200mのところにある。E棟屋上からは上空の様子をよく見渡すことができたが、地上近くの様子は建物などで視界を遮られて観察困難であった。午前7時頃から9時までの間に、肉眼と8倍の双眼鏡を用いて東から南の空を中心に観察し、ヒヨドリの群れが観察された時刻と個体数、行動を記録した。なお、鹿児島県本土においては、ヒヨドリは留鳥であり一年中観察される(鹿児島県環境生活部環境保護課2002)。このため、秋季に鹿児島市街地で見られるヒヨドリには、留鳥として生息している個体と、北方や山地からの渡り途中の個体と、越冬の目的で飛来した個体の3つの異なる繁殖集団に由来するヒヨドリがいると考えられるが、これらのヒヨドリを野外で形態などから区別することは困難である。ここでは、10羽以上の群れを形成して大学上空を通過

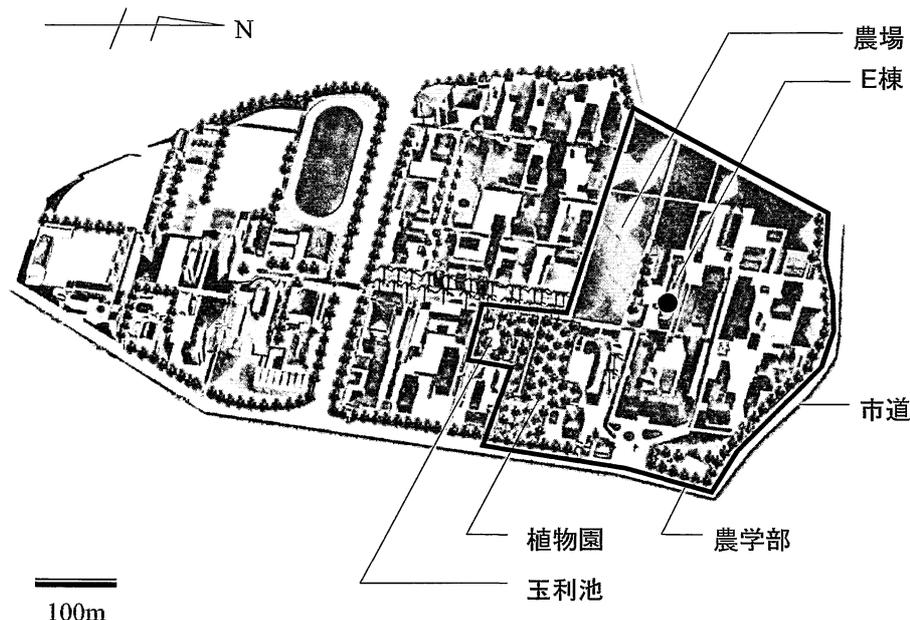


図1. 調査地(鹿児島大学郡元キャンパス)および観察場所。●, 観察定点

Fig.1. Study site (Korimoto campus of Kagoshima University) and the location of observation. ●, Observation point

表1. 2008年10月2日～11月6日の間に調査中に鹿児島大学構内で観察された鳥種
Table1. Bird species observed in the campus of Kagosima University during the survey from October 2 to November 6, 2008.

サギ科	Ardeidae	アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>
カモ科	Anatidae	マガモ属sp.	<i>Anas sp.</i>
タカ科	Accipitridae	トビ	<i>Milvus migrans</i>
ハヤブサ科	Falconidae	チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus</i>
ハト科	Columbidae	ドバト	<i>Columba livia</i>
		キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>
アマツバメ科	Apodidae	アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>
キツツキ科	Picidae	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>
ツバメ科	Hirundinidae	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>
セキレイ科	Motacillidae	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>
		ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>
ヒヨドリ科	Pycnonotidae	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>
モズ科	Laniidae	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>
ツグミ科	Turdidae	ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureoreus</i>
		イソヒヨドリ	<i>Monticola solitarius</i>
		シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>
ウグイス科	Sylviidae	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>
シジュウカラ科	Paridae	ヤマガラ	<i>Parus varius</i>
		シジュウカラ	<i>Parus major</i>
メジロ科	Zosteropidae	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>
アトリ科	Fringillidae	カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>
ハタオリドリ科	Ploceidae	スズメ	<i>Passer montanus</i>
ムクドリ科	Sturnidae	コムクドリ	<i>Sturnus philippensis</i>
		ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i>
カラス科	Corvidae	ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>
		ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>
19科25種			

するヒヨドリを渡り途中のヒヨドリと定義し、通過途中で大学構内に下りる行動や構内から飛び立ち飛去する行動が見られた10羽以上の群れも定義に含めた。また10羽未満であっても大学上空を高く飛び去るヒヨドリは渡り途中とし、以上のいずれかによることで、大学構内に留鳥として生息している個体および越冬の目的で飛来した個体と区別をした。また、ヒヨドリの群れを確認した後は、群れが視界から消え去るまで双眼鏡でその群れを追跡し、飛去した方向を記録して飛去方位を求めた。個体数は、10羽以下は1羽を単位として数え、それ以上は、できる限り1羽を単位としたが、困難な場合は10羽単位で記録した。また、定点による観察以外にも偶然に大学構内においてヒヨドリの渡りが観察された場合は、目撃の日時と観察個体数、飛去した方角を記録した。

また、鹿児島大学構内におけるヒヨドリの生息状況を確認するために、2008年10月2日から11月6日までに雨天時を避け6回（10月2, 8, 16, 23, 30日, 11月6日）、鹿児島大学農学部構内において周囲の市道も含めてルートセンサスを行った。センサスは日の出後1時間以内（6:48～7:09の間）に開始し、歩いて約1時間の約2kmのルート

に沿って、観察半径50m以内に出現したヒヨドリの個体数と行動、場所を群れや個体ごとに記録した。

結 果

渡り途中と思われるヒヨドリの群れは、10月2日から10月19日までの間で6日間観察することができた。大学上空を通過した群れは9群、通過途中で植物園や池へ下りた群れが6群、植物園から飛び立った群れが3群であった（表2, 3）。いずれの場合も数羽あるいは数十羽の群れを形成し、鳴き交わしながら観察地点上空を飛んでいた。複数の群れが同時に通過することはなかった。群れの通過は7時～8時ごろに見られることが多かった。晴天の日だけではなく、曇りや小雨が時々降るような天候にも観察された。南東～南西の範囲の方角へ飛去していたが、ほとんどの群れは南西か南南西の方角へ飛去した。群れサイズは平均（±SD）で33±20羽、最大で80羽であった。また、大学周辺の市街地上を通過するヒヨドリの群れは観察されなかった。

以下に、観察時のヒヨドリの行動を示す。

2008年10月2日8時03分：農学部構内を歩いている時に、

表2. 調査時間外に鹿児島大学上空を通過するのが観察されたヒヨドリの群れの個体数と飛去方位

Table 2. Number of individuals and flight direction of the Brown-eared Bulbul passed over the campus of Kagoshima University out of census time

年月日	目撃時刻	天気	個体数	飛去方位
2008.10.02	8:03	晴れ	20	SSW
2008.10.08	7:05	晴れ	45	SSW
	7:37		50	SW
	9:50		20	SW

表3. 定点観察中に鹿児島大学上空を通過したヒヨドリの群れの個体数と飛去方位

Table 3. Number of individuals and flight direction of the Brown-eared Bulbul passed over the campus of Kagoshima University during the survey

年月日	天気	調査時間	観察時刻	個体数	飛去方位
2008.10.09	曇り	6:55~8:15	7:25	15	*
			7:45	60	SSE
			8:05	30	SSE
			8:15	15	*
2008.10.10	曇りのち雨	7:00~8:30	7:35	15	*
			7:49	13	*
			8:00	25	*
			8:10	23	*
			8:10	50	SSW
			8:15	15	SSW
			8:15	7	SW
2008.10.12	うす曇り	7:11~8:15	7:28	40	SSW
			7:56	60	SW
2008.10.14	小雨	6:53~8:10		0	
2008.10.19	晴れ	6:58~8:40	7:58	80	SSW
2008.10.28	晴れ	7:07~8:40		0	
2008.10.31	曇り	7:57~9:00		0	
2008.11.05	晴れ	8:23~9:00		0	

* 植物園や玉利池へ下りる

北西の方向から20羽の群れが飛来し、植物園の方へと飛び去るのを目撃した。この群れが植物園内に下りたかは確認できなかった。

2008年10月8日7時05分：農学部構内をルートセンサス中に、北から45羽の群れが飛来し、植物園の方へと飛び去るのを目撃した。この群れが植物園に下りたかは確認できなかった。7時37分：農学部構内を歩いている時に、北西から50羽の群れが飛来し、植物園に隣接する玉利池の周囲の樹木上へ下りるのを目撃した。数分後、一斉に飛び立ち、南西の方角へ飛び去った。9時50分：農学部研究棟内の北向きの窓より、北東から20羽の群れが飛来し、南西の方角へと飛び去るのを目撃した。

2008年10月9日（定点からの観察）7時25分：北から15

羽の群れが飛来し、玉利池周囲の樹上へと下りた。その後、この群れの飛去は確認することができなかった。7時45分：北北西から60羽の群れが飛来し、大学上空を通過し南南東の方角へ飛び去った。8時05分：北から30羽の群れが飛来し、大学上空を通過し南の方角へ飛び去った。

2008年10月10日（定点からの観察）7時35分：北西から15羽の群れが飛来したが、玉利池上空にさしかかった時に急に下降し、池の周囲の樹上へ下りた。7時49分：北西から13羽の群れが飛来し、玉利池周囲の樹上へ下りた。数分後、植物園の方へと移動した。8時00分：北から25羽の群れが飛来し、植物園へ下りた。8時10分：北東から23羽の群れが飛来し、植物園へ下りた。同時に、50羽の群れが植物園から飛び立ち、南南西の方角へ飛び去った。8時15分：15羽の群れが植物園から飛び立ち、南南西の方角へ飛び去った。同時に7羽の群れが植物園から飛び立ち、南西の方角へ飛び去った。8時17分：小雨が降り出す。8時23分：北北東から23羽の群れが飛来し、大学上空を通過し南南西の方角へ飛び去った。

2008年10月12日（定点からの観察）7時28分：北北東から40羽の群れが飛来し、大学上空を通過し南南西の方角へ飛び去った。7時56分：北東から60羽の群れが飛来し、大学上空を通過し南西の方角へ飛び去った。

2008年10月19日（定点からの観察）7時58分：北北東から80羽の群れが飛来し、大学上空を通過し南南西の方角へ飛び去った。

2008年10月28日以降は観察されなかった。

大学構内では1センサあたり平均 26.5 ± 17.6 羽、最大で58羽のヒヨドリが観察された。1ヵ所や群れで観察された個体数は平均で 2.6 ± 5.6 羽、最小値が1羽、最大値が45羽であったが、この45羽の群れは2008年10月8日の7:05に上空を通過した渡り途中と思われる群れである。この群れを除いた場合の1ヵ所や群れで観察された個体数は平均 1.9 ± 1.1 羽、最小値が1羽、最大値が5羽で、1羽で観察されることが多く全体の47.5%を占め、2羽での観察が31.1%、3羽が13.1%、4羽が3.3%、5羽が4.9%であった。植物園内や池の周囲の樹上、構内の道路沿いの植栽木、校舎上に止まり鳴いていることが多かった。また、飛翔時は建物のすぐ上や樹冠近くを飛び、上空高くを飛翔する個体は10月8日の45羽の群れ以外に観察されなかった。

考 察

ルートセンサス中、大学構内で留鳥として生息していると思われるヒヨドリや越冬のために飛来したと思われるヒヨドリは、5羽より大きい群れで観察されることはなく、

単独か2羽での観察が多かった。また、それらのヒヨドリは飛翔時には建物や植栽木近くの低空を飛んでいた。このように、今回渡り途中と定義して観察されたヒヨドリの群れは、大学構内で観察されたヒヨドリとは群れサイズや行動の面から明らかに区別されることが確認された。

今回、渡り途中と思われるヒヨドリの群れが大学上を通過する様子が10月2日から観察され始めた。渡りの初認日を確認することはできなかったが、例年10月初旬は鹿児島大学構内で観察されるヒヨドリの個体数が増加し始める時期でもあることから（平田未発表）、10月の初めが本調査地域における渡りのヒヨドリの飛来開始時期ではないかと推測された。さらに、10月19日までは群れの通過が断続的に観察されたことから、少なくとも3週間程度はヒヨドリの渡りが続くと考えられた。

また、大学上を通過するヒヨドリの群れの一部にとって、大学構内の植物園や池が一時的な滞在場所として機能していることが確認できた。植物園内や池での群れの行動は明らかではないが、50分以上は滞在して調査時間中に飛び立つの確認できなかった群れや、30分近くとどまっていた群れがあったことから、飲水や採餌、あるいは休息などの目的で利用したと推察される。一方、ごく短時間しか滞在しなかった群れも見られ、捕食者からの逃避など採餌や休息以外の利用目的の存在も示唆された。また今回、大学の周囲の市街地上を通過するヒヨドリの群れは見られず、観察された群れの全ては植物園や池やそれらの周囲の大学上を通過していたことから、植物園や池が地上の目印としての役割を果たしている可能性も示唆された。今後は、植物園や池などで渡り途中のヒヨドリが何をしているのかを確認するとともに、秋季だけではなく春季の渡りにおいてもヒヨドリが植物園や池を利用するのかどうか、さらに、大学周辺の他の緑地の利用状況などを調査し、都市にある緑地がヒヨドリの渡りに及ぼす影響を明らかにする必要があると考える。

引用文献

- 藤田晋輔（編）（2004）鹿児島大学植物園の樹木たち。245 pp. 鹿児島TLO. 鹿児島。
- 樋口広芳・森岡弘之・山岸哲（編）（1997）日本動物大百科4 鳥類Ⅱ。pp180. 平凡社、東京。
- 池村平太郎・川口孫治郎（1920）ヒヨドリの渡り。動物学雑誌。32：363-365。
- 鹿児島県環境生活部環境保護課（編）（2002）かごしまの野鳥。166pp. 鹿児島県環境生活部環境保護課。鹿児島。
- 鹿児島県保健環境部環境管理課（編）（1988）鹿児島のです

- ぐれた自然。314pp. 鹿児島県公害防止協会。鹿児島。
- 唐沢孝一（1996）都市の鳥類と景相生態。沼田真（編）景相生態学：134-138, 朝倉書店、東京。
- 高野伸二（1982）日本産鳥類図鑑。474pp. 東海大学出版会。東京。
- 日本鳥類保護連盟（1985）九州・沖縄の鳥。163pp. 小学館。東京。
- 内田清之助（1983）渡り鳥。227pp. 築地書館。東京。

要旨

2008年10月2日～11月5日までの期間中に10日間、鹿児島大学構内において上空を通過するヒヨドリの群れを午前中に観察した。ヒヨドリの群れが通過する様子は、10月2, 8, 9, 10, 12, 19日の6日間観察された。ヒヨドリの群れは7～8時頃の間に見られることが多かった。ほとんどの群れは南西や南南西の方角へ飛去した。群れサイズは7～80羽、平均33羽であった。10月28日以降はヒヨドリの群れの通過は観察されなかった。この時期に10羽以上の大きな群れを形成し、また、上空高くを飛去する行動は大学構内で観察されるヒヨドリには見られず、これらの群れが、さらに南へ渡る途中のヒヨドリであることが推測された。また、大学上空を通過する途中で6群が大学構内にある植物園や池に一時的に下りた。このことから、本調査地の植物園や池のような都市緑地は、その上空を渡るヒヨドリにとって一時的な滞在場所としての役割を果たしていると考えられた。